

はじめに

弊社の技術研究所（技術センター）は設立 54 周年を迎え、今回、第 50 号の技術研究報告を発行することになりました。長い間、ご高覧いただいた読者の皆様に、略儀ではございますが御礼申し上げます。昨今弊社は、外部環境の変化に素早く対応し、社会に貢献するために、技術センター・工事部門・営業部門が一体となって、スピード感を持つ技術開発を行っています。今回もその成果の一部をご紹介します。

まず建築分野については、工業化工法や免震・制振工法、あるいは物流・事務所・住宅等の品質向上とコストダウンに取り組んでいる。今回は、物流・事務所等に効果的な構造技術「FRASH 構法」と「床振動対策技術」「耐震天井」の開発成果を報告する。また、今年、西新宿に国内初の 60 階建て住宅を着工した。既に一連の開発は完了しているが、継続的なフォローも行っており、今回はその成果について紹介する。

次に土木分野については、特にコンクリートと地盤の分野に取り組んでいるが、今回はコンクリートの施工技術（マスコンクリート、ICT の活用）と、当社独自の保有技術（砕・転圧盛土工法）の新たな展開を報告する。これらは、技術提案力の向上だけではなく、国土強靱化施策にも結びつくことが期待できる。

環境分野については、土壌・水・空気の浄化、省エネ・温熱環境、音環境の 3 つの分野に取り組んでいるが、今回は、新しい土壌浄化工法と放射性廃棄物を含む廃棄物の減量化技術の成果を報告する。これらは単なる工法開発にとどまらず、今後も新しい領域への発展を目指している。

昨今、イノベーションの手法が注目され、多くの事例研究やその講演が実施されている。その一つによればイノベーションのポイントは、①見たこと・聞いたことがない、②実行不可能ではない、③議論を生むアイデアである。①については、**Break the bias** すなわち「脳に作られる先入観を壊す」ことによって、新しい発想を生み出すことが必要である。③は、イノベーションは投資対効果がすぐに判断できないということで、アイデアの面白さと論理性を担保することによって、投資対効果の代わりにする必要がある。手法が理解できればイノベーションが生まれるということではないが、今後、その手法を強く意識して技術開発を進め、新しいシーズの提供に挑戦していきたい。

皆様には、本編を是非ご高覧頂き活用していただくとともに、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

平成 26 年（2014 年）11 月

上席執行役員 技術センター所長 小林勝巳